OVERWATCH 2

ヒーローたちの夜明け

運のいい男

MELISSA SCOTT 著

ストーリー
MELISSA SCOTT

アート
BORG SINABAN

編集
CHLOE FRABONI

制作
BRIANNE MESSINA, AMBER PROUE-THIBODEAU

デザイン
JESSICA RODRIGUEZ

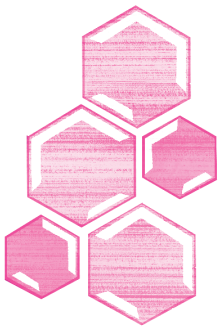
ストーリー監修
MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS

ゲームチーム監修
JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS

スペシャルサンクス
IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK

日本語翻訳
KOSUKE YAMASHITA

© 2024 Blizzard Entertainment, Inc.
Blizzard and the Blizzard Entertainment logo are trademarks or registered
trademarks of Blizzard Entertainment, Inc. in the U.S. or other countries.



ジャックは左に連なる建物に身体を近づけ、影が最も濃い部分に身を隠しながら、無人の街を駆け抜けた。首を傾けて、接近してくる戦闘ロボットたちの音に耳を澄ますと、バイザーが一回、二回と光る。ヌルセクターの軍勢が狭い交差道路を抜けてこちらへ向かってくる。この場を急いで離れれば交戦は避けられるが、合流地点は軍勢の先にある。始末できる。しない理由はない。ジャックは頭を上げ、屋根の輪郭に目をやった。どうやらここは住宅地のようだ。建物の高さは三階から四階ほど。大半は片側が傾斜する平屋根で、先週侵略されるまでは屋上庭園だったであろう残骸に覆われている。非常階段がある。願ったり叶ったりだ。非常階段で屋上に上がり、屋根の輪郭に沿ってひっそりと移動すれば、目前に広がる大通りで戦闘ロボットに奇襲をしかける絶好のポジションを確保できるだろう。

その考えがまとまる前に、ジャックの体は動いていた。金属製のはしごを掴み、建物を素早くよじ上る。はしごの金属は腐食していて、体重をかけるとボルトがきしんだが、なんとか上りきるまでは持ちこたえてくれた。屋上に庭園はなく、あるのは細い煙突だけだった。横目でドローンの位置を確認すると、ジャックは隣の屋根へ飛び移った。しかし仕切りの壁は低く、レンガ作りで身を隠すには不十分だ。ジャックは次の屋根へ飛び、煙突の影に身をかがめると、大通りが見える位置までジリジリと移動した。

してやったり。三体の戦闘ロボットがゆるいV字陣形をとって十字路を進んでいく。大型の砲台ユニットだ。周囲を探るように、肩のキャノンが左右にゆっくり旋回している。ジャックはニヤリと笑った。砲台ユニットは手強い相手だが、極めて動きが鈍い。先頭の一体だ。ジャックはそう考えた。そうすればほかの二体は一体目の残骸が邪魔で前に進めず、素早く後退することもままならなくなるだろう。

ジャックは屋根の端に立つと、自分にとっての最初の一撃であり、敵にとって最後の一撃をくらわせるため、パルス・ライフルを構えた。巨大なマシンのど真ん中にボルトが叩きつけられると、マシンの脚部が傾いた。ジャックは照準を変えるとキャノンに狙いを定めた。最初の二発が的中し、戦闘ロボットの肩部の武器が吹き飛んだが、三発目は肩をかすめただけだった。今度は脚部に照準を合わせ、先頭にいるロボットの前脚の膝関節を一つ破壊した。残り二体の砲台ユニットがこちらに武器を向け、やみくもに屋根伝いに砲撃した。ジャックは頭をかがめ、新たな遮蔽物へ飛びついた。そのとき、道をはさんで反対側の屋根から何かがこちらへ発射される機械音が聞こえてきた。戦闘ロボットの増援だ。

ジャックは素早く身をひるがえし、悪態をつきながら嵐のように降りそそぐ煉瓦と石をかわすと、姿勢を立て直して反撃を開始する。空中に跳び上がったヌルトルーパーを撃ち落とすも、トルーパーは次から次へと跳んでくる。トルーパーの始末を終えると、ジャックは大通りのロボットに目をやった。先頭のユニットは何も見えていないかのようにグルグル回っている。センサーが外れたのだろう。ほかの二体が射撃を再開した。ジャックはロケットに切り替え、敵の脚部を狙った。大通りが光と熱で満たされ、光と熱が消えるとともに、砕かれたアスファルトの上に戦闘ロボットたちの残骸が散らばっていた。そのうちの一体はキャノンをすべて失っていたが、まだ三本の脚を保持しており、標的を求めてもがいていた。ジャックがとどめの一撃を撃つと、路上のがらくたから煙があがった。

ジャックが屋根の端に身を寄せると、自分の息が耳の中で大きく響く。ヌルトルーパーの攻撃を避けたときから、肋骨に鋭い痛みが走っていた。トルーパーの存在を察知し、最初の砲台ユニットを初撃で完ぺきに破壊しておくべきだった。肩を回して、張りつめた身体をほぐそうとするジャック。すくなくとも今回は運がよかった。ジャックはいちばん近くの非常口を通って、合流地点へと向かった。何ごともどうにかなるものだ。

この区域ではほとんど戦闘が行われていなかった。電気は停まっており、言うまでもなく道沿いの窓はことごとく割れていたが、火災は一切起こっていない。住民たちはシェルターに逃げこんだか、すでに避難したのだろう。助けを求める声もない。その静けさは不気味なほどだった。聞こえてくるのは自分の足音と、地面を覆うガラス片が砕ける音のみ。ジャックはセンサーを確認した。ヌルセクターは五キロほど離れた区域に戦力を集中している。好都合だ。おかげで静かに情報提供者と接触できるだろう。

合流地点は目前だ。連なる古い建物のあいだに建つ、近代的で細長い三階建てのタワー。扉は封鎖され、一階の窓はすべて重厚な金属製のシャッターで守られており、上階の窓は砕けたネオン管で縁取りされている。屋上にある広告用のディスプレイは、隅が破損していて画面は真っ黒だ。ジャックはその建物を入念に観察したが、何も動きはない。周囲の建造物の屋根にも動きはなく、センサーに映るような怪しい熱源も存在しない。情報提供者は、左側の小道から屋根に上がれると言っていた。たしかに、窓や石造りの装飾をたどれば簡単に屋根まで上れそうだ。

ジャックはタワーの横側を上り、屋根の端を一周しながら周囲の建物を探ると、スクリーンの近く

「運のいい男だ」自身の服の袖にあいた穴に指を通しながら、レイエスがつぶやいた。ノートンは二人を見て笑った。

「運がいいですって？あなたたちの“幸運”は、私に選ばれたということだけよ」ノートンは言った。「少し撃たれたくらいじゃ死なない身体にしてあげたんだからね」

に腰を下ろした。ここなら接近してくる経路はすべて視界に収められる。心配することはない、早く来すぎたのだろう。情報提供者は来る。そしてこの長く苦しかった狩りもついに……。

しかしジャックは我に返る。気を緩めてはならない。再び周囲に視線を走らせる。今、対処しなければならないのは目前の脅威。遠くに、ヌルセクターの襲撃による煙が見える。風に乗り、燃えるプラスチックのにおいがあたりに漂ってきた。

苦い粉塵――熱、耳鳴り、太ももを貫く幻肢痛――。

ジャックは記憶の淵から思考を引きもどし、アナのことを思い浮かべた。新しい罪悪感で古い罪悪感を追い払うというわけだ。やっと再会を果たしたばかりで、再びアナのもとを離れるのは心苦しかったが、ジャックは救うべき者たちがいることを理解していた。クライシス以来、それを忘れたことはない。

アナの記憶に代わって頭の中に現われたのは、ヴィクトリア・ノートンの乱れた髪と鋭く険しい顔だった。クライシスの初期、切望された勝利を合衆国にもたらした強化兵計画の天才。あの日、ノートンは奴らと一緒に、オムニック・クライシスではじめて実戦配備された現場にやって来ていた。“自らの成果を視察するため”だと、輸送機の近くに散乱する遺体をまたぎながら、あの女はそう言った。戦力の半数を失い、残った半数も負傷していたが、二人の強化兵によって戦況を大きく変わった。たった二人で要所を押さえ、オムニックの大群を撃退したのだ。ジャックは三発の銃弾を食らったが、ほとんどかすっただけで帰路につくまで傷に気づきもしなかった。

「運のいい男だ」自身の服の袖にあいた穴に指を通しながら、レイエスがつぶやいた。ノートンは二人を見て笑った。

「運がいいですって？あなたたちの“幸運”は、私に選ばれたということだけよ」ノートンは言った。「少し撃たれたくらいじゃ死なない身体にしてあげたんだからね」

ジャックは輸送機の周囲を見回した。血と燃える鉄のにおいが充満し、数か月前のジャックと同じように、すでに死んでいるか、これから死ぬかのどちらかでしかない一般兵で溢れかえっている。衛生兵や医療品、つまり負傷兵を助けるためのすべてが不足していた。ジャックは兵士たちの命を預かりながら、その責務を果たせなかった。自分に何ができるかを知っていたら、理解していたら、もっとできることがあったかもしれない。「今日の結果を考えると、この作戦によって計画が成功したとは言いがたいな」ジャックがそう言うと、ノートンは舌打ちした。

「優れた将軍よりも運のいい将軍のほうがいい。ナポレオンの言葉だったかしら？今日からは、あなたたち二人のほうがいい、と言われるようになるわ」

ノートンは背を向けた。その後ろで、ジャックとレイエスは痛切な視線を交わしあう。これが幸運だというなら、二人ともそんなものは欲しくはなかった。

センサーが反応した。ジャックはハッと我に返ると、遠くでちらつくように動く何かに意識を集中させた。あそこだ。屋根窓の上で光が揺らめき、屋根のタイルが音を立てている。その場所を警戒するために位置を変え、ジャックは物陰に身を寄せた。輝きを発する金属の塊が宙を飛び、屋根の反対側にある広告スクリーンの向こうに下り立った。ジャックはトリガーに指をかけるが、自制心をふるって指を抑えた。情報を漏らし、囁き続けている者が何者なのか知る瞬間を待ち望んでいたからだ。オーバーウォッチに何があったのか、その“真実”へとジャックを導く者の正体を突き止めなければならない。

紫色の光が揺らめき、ほっそりとした人影が現われた。ジャックは小声で悪態をついた。ドラドで鉢合わせたあの女のことはすぐにわかった。パルス・ライフルの照準を向けながら、広告スクリーンの向こう側へジャックは駆けていく。急がねば。

ソンブラはすぐにジャックに気づき、何も持っていない両手をあげた。「そうあせらないの」

「情報提供者に何をした？」ジャックは尋ねた。バイザーで周囲を探り、タロンの罠がないか調べる。こんなことをしている場合ではない。奴らが情報提供者の命を奪ったのだとしたら、すべてが振りだしに戻ってしまう――

「よーく考えてみて」ソンブラは両手をあげたままニヤリと笑った。「正直言うと、もっと早く来ると思ってたわ」

状況が掴めてきたジャックは眉をひそめた。「情報提供者は、お前か」

「ご名答」

「なら話は終わりだ」ジャックはライフルを向けたまま、うしろに下がる。この女のことはもう何年も前から知っている。ソンブラのボスを追うジャックを、ずっと煙に巻いてきた女だ。「お前の言うことは何一つ信用できん」

「そうカッカしないの」ソンブラは面倒くさそうに言った。「私は確かにタロンのために動いてるけ

「私たち“お友だち”じゃない」ソンブラは答えた。「今回のことはタロンとは無関係。それに……今さらあなたに失うものがあるかしら？もうずいぶんと多くのものを失ってきたみたいだけど」

ど、実際のところフリーランスなの。あなたの元親友と比べればね」

「今レイエスの話はしていない」

「そうね。二人にとっては耳の痛い話よね。わかった、わかった。私のことを信用できない気持ちはわかるけど、私はずっと前から追ってきたの。かなり大きな獲物をね。ずっと、ずーっと前から。で、あなたも同じ獲物を追ってたってわけ」ソンブラが片手を下げると、手のひらの光がねじれるように踊った。「これで話を聞く気になったかしら」

「続けろ」パルス・ライフルの照準をソンブラの胸部に当てたままジャックは言った。この女に油断は禁物だ。

ソンブラは呆れ顔で光を消した。「わかったわよ。あなたって本当に疑い深くて嫌な奴なのね」

「それが生き延びる秘訣ってやつさ」ジャックは答えた。

「運がいいだけでしょ」ソンブラはニッと笑った。「私たちの標的は同じ」

「詳しく聞かせろ」ジャックは言った。

「私が握ってる証拠は、このチューリッヒにある国連の保管施設に収められてる」ソンブラは言った。「オーバーウォッチのスイス本部の残骸が保管されてる場所よ。ほらあの墓場みたいな場所。手伝ってくれたら、情報はあなたのものよ」

ジャックは首を振った。「断る。お前にはお似合いだが、俺の仕事じゃない」

「あら、そうかしら？」ソンブラはジャックの目の前でホロスクリーンをフリックした。

ウォッチポイントから実験兵器が盗まれる：グランド・メサ

ジャックは首を振った――国連の保管庫から武器を取り返したのは正当な理由があってのことだ。世界はすぐにそのことに感謝するだろう。

「タロンの手助けはしない」ソンブラの反応を見ようと、ジャックはまた一歩うしろに下がった。

「私たち“お友だち”じゃない」ソンブラは答えた。「今回のことはタロンとは無関係。それに……今さらあなたに失うものがあるかしら？もうずいぶんと多くのものを失ってきたみたいだけど」

ジャックはためらった。迷う価値すらないほど馬鹿げた話だ。信頼できる仲間と一緒でも施設への侵入は困難を極めるだろう。ヌルセクターの襲撃を受け、これまでになく厳重な警戒態勢が敷かれているはずだ。ソンブラに裏切られたら死は避けられない。自ら築き上げた瓦礫の山で息絶えるジャックを見殺しにして面白がるのがソンブラという女だ。ではソンブラの話に何か裏があると仮定しよう……。ソンブラが嘘をついていようと、たとえすべて嘘だったとしても、この女は犯行現場に戻るまたとない機会を提供してくれる。この機を逃せば、あの日の残骸を調べることはできないだろう。調べれば何かわかるかもしれない。いや、わかるに違いない。「いいだろう。だが、警備の相手はしない。殺しはなしだ」

「誓う。指切りしてもいいわ」ソンブラは肩をすくめた。「それに、ヌルセクターの襲撃がいい陽動になってくれてる。警備の半分はそっちに配備されてるわ」

確かにそのとおりだった。侵入するには好都合だ。「あの襲撃はタロンの仕業だったのか？」

「私は仕事と娯楽を混同したりはしないわ」ソンブラは答えた。「来るのよね？」

ジャックの返事を待たずにソンブラは背を向けると、屋根からするりと滑り降りていった。

ジャックはまた汚い言葉を吐き捨てた。馬鹿で危険なことだとはわかりきっている。だが、これは長き道の果てに残された唯一の手がかり。それに、いつでもパルス・ライフルで撃てる。ジャックはソンブラについていくことにした。

国連の保管施設は工業区画にあった。飾り気のない倉庫や近代的で安っぽい建物ばかりが林立する細い区画だ。周囲の建物に比べると保管施設はまともな作りをしており、かみそり鉄線を上部にいただく電気フェンスの向こう側には、窓のない壁がのっぺりと立っている。ゲートの守衛小屋は一つ。装甲板で固められた壁は砂嚢によって幾重にも補強されている。神経質そうな面持ちの警備員三人が構えているのは自動ライフルだろうか。――ソンブラは正しかった。侵入経路を探るジャックはそう思った。警備員の大半がヌルセクターの襲撃の対応に派遣されている。そうでなければ、もっと多くの警備員がゲートを守っていたはずだ。だが、あの三人をやり過ごして中に入ろうとすれば、すべての警報が鳴るだろう。ジャックはソンブラを見た。「いい考えでもあるんだろうな？」

「ふふっ。あなたなら全員どうにかできるでしょ」ソンブラは右のほうを指し示した。隣の建物用のゴミだらけの小道がある。「けど、今回は私がやるわ」

ジャックは再び警備に目をやると、小道を行くソンブラのあとを追った。ほどなくして、落書きに覆われたコンクリート製の壁が二人の行く手を阻む。反対側の倉庫の壁には窓も塗装もない。内側から頑丈に補強されているタイプのコンクリートだろう。

「こっちよ」ソンブラが言った。

小道の行きどまりでジャックはソンブラに追いついた。目の前の壁は三階ほどの高さで、その上に

は通電したかみそり鉄線が張り巡らされている。「行き止まりに連れてこられて怪しんでる？」

「いいや」ジャックは首を振った。

「お利口ね」ソンブラはホロスクリーンを取り出した。ライトが赤く点滅すると、その指がバーチャル・コントロール上でせわしなく動く。頭上で光がまたたき、ジャックが見上げると、壁の上に四角い形状が表示されていた。「あれは防犯フェンスの調整器。あれがないと電力の変動を抑えられないようね。私たちには好都合――」そう言いながらソンブラが手を動かすと、スクリーン上でさらに多くのマークが明滅した。「不都合な点といえば、あなたの助けが必要なことね」

「なぜ俺の助けがいる？」

「疑い深いわね」ソンブラは呆れ顔で言い放った。「ステーションのこっち側の電力を切るには、あそこに上がる必要があるからよ。それであなたの支えが必要ってこと」

「壁を越えるということだな？」

「物分かりがよくなってきたじゃない」

ジャックはため息をついたが、その必要性は理解していた。前かがみになってソンブラを肩に乗せると、ジャックはゆっくりと立ち上がりソンブラの足を支える。ソンブラは猫のように優雅に姿勢を保った。調整器へ手を伸ばすソンブラの体重が肩の上で動くのを感じた。*パチン*という音がしたかと思うと、機会的な音声が流れる。*アクセス・コードが必要です。十秒後に警報が鳴ります。九、八…*

「ソンブラ……」

もう一度*パチン*という音が鳴ると音声が止まった。「まさか、本気で心配してたのかしら？」ソンブラは言った。*ピンピン*と、鉄線を断裂する音がして、ソンブラの体重が唐突に肩から離れる。ジャックが見上げると、ソンブラは壁にまたがるように座っていた。鉄線が切り裂かれ、二人が通るのに十分な隙間ができていた。「さあ行くわよ」

ジャックは覚悟を決めて跳躍すると、壁の上部を両手で掴んだ。一瞬もがき、再び自らの老いを感じながら、壁の上によじ登ってソンブラの隣に立つ。パルス・ライフルを胸元に構え、保管施設の窓のない壁に視線をめぐらせる。「カメラは？」

「片づけたわ」四つのホロスクリーンがソンブラの前で踊った。ソンブラはそれらを一つひとつフリックし、素早く調整する。「左手に荷物搬入口がある。見える？私が合図したら、そっちに走って」

ジャックは合図を待った。

「今よ！」

荷物搬入口に向かってダッシュし、格納庫に飛びこむと、ジャックは出入口の物陰に全身をぴたりと寄せた。フェンスの電流がパチパチと音を立てる。影からソンブラが背後に現われ、猫のような笑みを浮かべる。ソンブラは扉の電子錠につながるパネルに手を当てると、指で電子システムに光のパルスを送った。*カチッ*。荷物搬入口の扉がたわむように開いた。ジャックが扉をつかみ、ソンブラがわきをすり抜けて施設内に入る。

通路は暗闇に包まれていた。予備電力は来ているようだが、蛍光灯はすべて切れている。ソンブ

ジャックはその計画が気に入らなかったが、いい代替案は浮かばなかった。

ラは周囲を探り、手のひらほどの大きさのホロスクリーンを宙空に浮かべた。

「カメラはこれでよしと。お次は――」ホロスクリーンが図面に変わり、通路が表示された。「施設の中心部や警備が厳重な区画はすべて地下にあるわね。最下層は地下十五階。私たちの獲物は地下十三階。最重要機密はそこに保管されてる」

「警備の半分がヌルセクターの対処に派遣されたとはいえ――」ジャックはホロスクリーンを見つめながら言った。「ここに残された警備員は厳戒態勢をとっているだろう。わずかでも異常事態の兆しがあれば、重要区画の警備網を後退させ、すぐに増援を呼ぶはずだ」

「つまり、陽動作戦が必要ってことね」ソンブラが笑みを浮かべて言った。「目的地から警備員を引き離さないと」

「監視技術は?」ジャックはその計画が気に入らなかったが、いい代替案は浮かばなかった。

「お手の物よ。非常階段のシステムをフィードバック・ループに放りこむ。そうすれば、私が送った画像以外は見えなくなるわ」影の中でソンブラの手が明滅し、ウィンドウが投影された。メニューがスクロールされていき、いくつものコマンドが発せられるとウィンドウが消える。「階段を抜けたら見つかっちゃうけど、その頃には警備は別の場所で大忙しよ」

まだ計画が気に入らなかったが、もう後戻りはできない。「わかった。とにかくやれ」

別のホロスクリーンがチカチカと現われると、アイコンがまたたき、ソンブラのスワイプで消える。「行ってらっしゃい」

「互いへの連絡はどうする?」

「あなたの通信周波数なら知ってるわ」

――この女なら知っていて当然だ。「その回線は無駄に使うな。ここのシステムは国連以外の帯域だろうと通信を傍受する」

「ご親切にどうも」ソンブラは最後のウィンドウを消し、施設内部へと通じる扉を指さした。「非常階段は中に入って十メートル左にある。警報は鳴らないし、監視カメラはハックしてある。ひと騒ぎしておびき寄せたら、急いで合流するわ」

ジャックはうなずくと迷う気持ちを吹っ切るように扉を押し開けた。警報は鳴らない。がらんと開

けた五階建てほどの高さの空間に、移動用のキャットウォークや荷物運搬フレームのレールが投げかける影が交差している。ここもメインの照明は切れていた。ヌルセクターの襲撃のせいで、施設全体が発電機で稼働しているのだ。それでも非常灯のおかげで、その階に動きがないことが見てとれた。上階がどうなっているかは判断が難しく、いちかばちかで進むしかない。

“十メートル左”とソンブラは言った。ジャックは何か動きがないか頭上を警戒しながら、その方向へジリジリと進んでいった。プロトコルによると警備員はコントロール・スペースと保安エリアの中心部まで後退することになっているが、無意味にうろついている者が絶対にいないという保証はない。何も動きはなかったが、ジャックは細心の注意を払いながら階段吹き抜けに続く扉に到達する。錠のプレートに手を置いた瞬間、警報が鳴るかと思ったが、扉はすんなり音も立てずに開いた。遠くで鈍い*ドスン*という音がした。金属が金属にぶつかる音。ジャックは急いで扉を抜け、後ろ手に扉を閉めた。

階段の吹き抜けは施設内よりもさらに暗く、二階下の赤く小さな照明が遠くでかすかに光っているだけだった。手を振ってみたが、動体センサーもソンブラのハッキングによって停止しているようだ。ささやくように悪態をつくと、ジャックはバイザーを暗視モードに切り替え、周囲の密閉空間を探って誰もいないことを確認した。目指すは十三階。そろそろ動かねばならない。

ジャックは階段を降りはじめた。金属製の踏み板によって足音が反響しないようにしながらも、急いで歩みを進める。遠くでまた*ドスン*という音がしたかと思うと、耳元でソンブラの声がささやいた。「もう階段に着いたかしら？」

「オスカー・マイク」

「“カルロス・ロベルト”とでも返したらいいのかしら」

ジャックはため息をついた。アナとの仕事が長すぎたらしい。「階段に到達。移動中だ」

「よかった。十三階の動体検知器を停止させておいたわ」

「了解」

*カチッ*という音とともに通信が切れた。ジャックはようやく十三階の扉までたどり着いた。扉は容易に開いた。この階の非常灯はこれまでよりも明るい。扉をすり抜けて通路を走り、かすかな影に身を隠す。ジャックは曲がり角におり、左右には何の変哲もない廊下が広がっている。ジャックは渋々通信を入れた。「ソンブラ。案内を」

「ちょっと待って」新たな図面がバイザーに現われジャックは驚く。――あの女は何にでもアクセスできるのか？外周の通路は四角形になっており、そこから中央の四角形に向かって何本もの通路が伸びている。「あなたの現在地はここ」青色の星が右下の隅に表示された。「警備はそこ」中央の四角形の周りにいくつか赤い点が浮かぶ。その大半は一本の通路に固まっている。おそらくはそこが中枢棟の極秘保管区画へと通じる主要経路だろう。ほかにも四角形の端に散らばっている赤い点がいくつかあり、これはおそらくパトロール隊だろう。

「何人いる？」ジャックは尋ねた。

脳内をうごめく論理がとどめを刺せと問い詰めてくる。警備員が生き延びれば正体を知られてしまう。現場に残された情報が多ければ多いほど、追跡される可能性は高まる。

「靴のサイズまで教えてあげましょうか?」ソンブラは答えた。「数は――十人。密集してたら十二ってとこかしら」するとソンブラのすぐ近くで爆発音が聞こえた。ジャックは本能的に背を丸める。

「あら。もう行かなきゃ」

通信が切れる。だが、図面はバイザーに表示されたままだ。ジャックはできるだけ多くの情報を得ようと図面を眺めた。図面を小さく縮小し、ここからの作戦を練る。まずは警備員を一人排除する。ほかの警備員たちが状況把握に乗り出した隙に、通路を迂回して扉を守っている連中を処分する。持ち場を離れて襲撃者を探しにいくのはプロトコル違反のはずだが、オーバーウォッチにいた頃、部下の兵士たちが似たような失敗をしょっちゅうしでかしていた。警備員がこちらの陽動作戦に乗らなかったとしても倒すことができる。ジャックは装備を確認すると、スタン弾に切り替えた。必要以上に命を奪う必要などない。ジャックはソンブラが動体検知器を本当に停止させてくれたことを祈りながら左折すると、最初の警備員が巡回している十字路めがけて突っ走った。

動体検知器は停止していた。しかし、ほかのセンサーはまだ作動していたようだ。警報が鳴り響き、ジャックは十字路の端に到達すると警備員と対峙する覚悟を決めた。警備は三人だ。ヌルセクターの侵略で緊張状態にあったところ、突然の警報にうろたえているようだ。ジャックは素早く三発撃った。まず二人が倒れ、三人目は足に弾を受けてよろめいた。ジャックは再び撃つ。三人目が倒れ、意識を失った。ジャックは倒れた三人をその場に残して十字路まで駆けもどり、全力疾走で走った。そして外周の通路に到達するや否やくるりと背を向け、扉を守っていた警備員たちが内周の通路を使っていることを祈りながら、重要区画への通路を目指して走り続けた。

「ソンブラ!」ジャックは通信機に向かって吠えるように言った。「警報をなんとかしろ!」

すぐには返事がこなかったが、少しして息切れとともに応答が返ってきた。「こっちは“元気な”子たちが来てるの!やるだけやってみるわ!」オートマチックの銃撃音がソンブラの声をつんざき、通信はまたもや途切れた。

――いいだろう。スピード勝負というわけか。ジャックは、警備員たちが寄り集まっている通路端の守衛所を見やった。ボディ・アーマーに身を包んだ国連の兵士が六人。そのうちの一人は操作盤に向かって身をかがめている。ジャックは引き金を引いた。リーダーらしき兵士が倒れるのと同時に突っ走るが、扉の近くにいた警備員たちが我に返り、撃ち返してくる。肩に衝撃を感じ、ジャックはうなった。バイザーの標示を目印にしつつ、ジャックは銃口を足元に向けて掃射した。警備員たちは倒れながら通路に転がった。ジャックは素早く人数を数える。六人。さっき倒したのが三人。ソンブラの数字が正しければ、残りは多くても三人――。

ブーツが金属をこするような音を耳が認識した瞬間、ジャックは横に飛び跳ねて銃を撃った。命中こそしなかったが、ロケットの衝撃波によって最後の警備員たちの体勢が崩れる。床を転がって応射を避けたジャックが起き上がって撃ち返すと、彼らもまた倒れた。

ジャックはしばらくその場で耳を澄ませながら、ソンブラの図面を開いて階層全体を見渡した。すべての警備員をやったはずだ。最初に倒した三人も、持ち場に残っていた者たちも、全員、昏倒か戦闘不能な程度に負傷している。脳内をうごめく論理がとどめを刺せと問い詰めてくる。警備員が生き延びれば正体を知られてしまう。現場に残された情報が多ければ多いほど、追跡される可能性は高まる。これまで人を殺めたことがないわけではない。だが、今とは状況が違う。この警備員たちを仕留めるのは殺人鬼の所業だ。今日その一線を越えるつもりはない。

警備員たちは拘束具を持っていた。ジャックは全員の身体を手際よく物色すると、それぞれが持っていた拘束具で縛り上げた。見逃すなど危険で馬鹿げた行為かもしれない。だが、ジャックにはそれでよかった。最後の一人を拘束し終えると、ジャックはコンソールを調べる。損傷しているわけではなさそうだが、画面は真っ暗だ。自動でシャットダウンするようになっているのか、それとも警備員がシャットダウンさせる時間を与えてしまったのか。いくつかボタンを押してみたが反応はない。

「ソンブラ。お前の出番だ」

「ジャック、今手が離せないの。あとでこっちから連絡する」かなり近くに敵がいるようで、ソンブラの声は銃撃戦の騒音のせいでほとんどかき消されていた。ジャックは悪態をつく。あれは陽動なんてものではない。ソンブラは敵に見つかってしまったのかもしれない。だとしたら……現実的には脱出する以外はない。ほかの警備員に気付かれずに引き返して施設から脱出するのは、ジャックにとっては容易なことだ。だがそんなことをすれば、この保管区画まで来るチャンスは二度と訪れないだろう。ソンブラが嘘をついていたとしても、あるいはその情報に誤りがあったとしても、ジャックの使命に意味のある何かがこの先の瓦礫のなかに眠っているに違いないのだ。答えはあまりにも近くにある。見過ごすわけにはいかない。

警備員の一人が目覚め、意識が朦朧としたまま拘束具にも気づかずに両手を引っぱった。ジャックはその男のすぐそばまで行き、国連の軍服のポケットやポーチを慣れた手つきで物色する。期待はしていなかったが使えそうな物は見つからなかった。ジャックは男の身体を掴んで立たせ、その顔を壁に向かせた。「あの扉を通りたい」

「俺にはアクセスがない」ジャックが体重をかけ、男の身体を硬い床板に押しつけると、男は顔を歪ませた。

「じゃあ誰なら持っている?」

「俺たちは誰も――」

それを聞いてジャックがうなると、警備員はあわてて付け足した。「俺たちはただの警備員だ。鍵は二つ要る。中に入るには一つ目の鍵と、さらにアクセス許可が必要なんだ。鍵の一つは中尉が持ってる。けど、その鍵だけじゃ意味がない」

ジャックは床を強く叩いて暴言を吐いた。警備員は悲鳴をあげ、赤子のように身体を丸めたがジャックはそれを無視した。国連の保安施設では、その類の二重鍵を使うプロトコルになっていたのだ。立ち上がって、マイクを入れる。

「ソンブラ」返事はなく、まったくの無音が続く。ジャックは通信機に向かって叫びたい衝動を抑えた。「ソンブラ、応答しろ。ちくしょう」

やはり応答はない。あの苦い粉塵の味が蘇り、記憶を頭の片隅に押しこむ。おそらくこれは逃げろという合図なのだろう。増援が来る前に急いで逃げ出せということだ。しかし、ジャックは中尉を探していた。その男はまだ意識が戻らず、操作盤の近くで不格好に気を失っていた。ジャックは中尉に回復体位をとらせ、ポケットを探る。さっきの警備員の勘違いであることや、誰かのミスで中尉が鍵を二つとも持ち歩いていることを願う。しかしそんな願いは叶うはずなどない。中尉は鍵を持っていた。黒い四角形のプラスチック板が優美な金色の線で覆われている。鍵を少し調べたのち、操作盤の読み取り機に挿入する。二つのディスプレイが表示され、警告文が点滅したが、ロック・システムは頑固なまでにオフラインのままだった。

「ソンブラ、応答しろ」ほかの警備員を手早く探ったが、何も見つからなかった。「ソンブラ!」

脱出するべきだ。これ以上待つ理由はないし、ソンブラの計画が破綻したことは明らかだ。生きて脱出できるだけでも運がいい。ジャックは扉に目をやると、その強度を測った。コンクリート製のプラグ・ドアが鋼鉄で補強されている。パルス・ライフルでは歯が立たないだろうが、ロケットを一発か二発撃てば――

ジャックは自らを制した。警備員たちが守っていた場所は、国連が全力で防爆仕様を施した場所だ。扉を爆破しようものなら、ここにいる全員が吹き飛ぶほどの衝撃波を発生させることになる。ジャック自身も無事では済まないだろう。しかも、それでも扉が破壊できない可能性すらある。超高性能なレーザー・カッターが必要だ。あるいは、ソンブラがシステムをハックしてくれるかだが、あの女はもう当てにならない。ジャックは扉に拳を叩きつけた。骨で感じられるほどの硬さ。失った者たちの復讐も、守ってやれなかった者たちに対する弁明、そして追い求めてきた答えのすべてにあと少しで手が届きそうだというのに……。

苦々しい味が口に戻ってくる。爆発のあとには押し包むような静寂があった。全身が痛み、中でも脚がひどく痛む。だが、それはあのときの記憶であって、今ではない。空気中に漂う粉塵など見えは

警告灯がジャックを馬鹿にするかのように点灯している。侵入者、セキュリュティ違反のアラート――今すぐ立ち去るべきだ。

しない。すべては幻。あの場を逃れることができたジャックは運のいい男だ。ジャックは激しく身体を震わせ、再び通信を試みた。

「ソンブラ――ソンブラ、応答しろ！」

応答はなかった。もとより期待などしていない。ジャックは再び操作盤の方に振り向くと、何か見落としていないか急いで調べる。警告灯がジャックを馬鹿にするかのように点灯している。侵入者、セキュリュティ違反のアラート――今すぐ立ち去るべきだ。

何かがガチャガチャと音を立てて通路端の床板に散らばった。ジャックは素早く振り返り、パルス・ライフルを構えてバレルを動かした瞬間、ソンブラの装置が見えた。装置がピカリときらめくとVの字の紫光が発せられ、輝きの中からソンブラが物質化した。

「いったいどこをほっつき歩いてやがった？」

「失礼ね！大役を任されてたのはこっちじゃない。誘い込むのって思ってるより大変なんだから」ソンブラは応えた。「けど、私は友だちを見捨てて逃げたりしないわ」

ジャックはそれを無視して手振りで扉を示した。「この扉をなんとかしなければならん。大至急だ。ほかの警備員が到着するまであまり時間がない」

「でしょうね」そう言うとソンブラはポケットから薄いプラスチック片を取りだした。プラスチック片の上にソンブラが手をかざすと、その表面に光が踊る。「あら、ちょうどよかった。鍵を見つけておいてくれたのね」ソンブラが手元のカードをもう一つのスロットに挿しこむと、一本の線が宙空に現われたウィンドウへと伸びていく。すると、操作盤上でライトが点滅した。ソンブラは舌打ちして指を動かす。ソンブラの背後でため息のような音とともに扉が開いた。

ジャックが扉を引っぱると、壁の内側へ戻ろうとするほどの重量が感じられた。「どの区画だ？」

「待って」ソンブラは操作盤を操作して、ライトの点滅パターンが変わるのを見てうなずくと、急いでジャックに追いついた。「4Aのはずよ」

ジャックはすでに動いていた。いくつもの箱が積み上げられた二つの大きな山のあいだに走るキャットウォークを駆け下りる。箱はいずれも厳重に密封されていて、外付けの空調システムが取りつけられている。隔離環境を作っているのだろう。証拠の収集と保管に関する過去のプロトコルの記憶を掘り起こす。収容ユニットは互いに切り離されていて、それぞれがフレーム構造に納められていた。一つや二つ破損しても、ほかのユニットが影響を受けないようにするためだ。ラベルに論理性は

ない。FG10の次が052、その次がC-17。しかしジャックの視線の先に、封じられた扉の上に記された赤い文字が現れた。「あそこだ」

「なるほどね」ソンブラはジャックの隣の足場に滑りこみ、宙空にホロスクリーンを表示させた。ラベルの隣には警告記号があった。生物学的危険物質、可燃性物質、発がん物質、腐食物質。ジャックは視線をソンブラに移した。

「いったい何を保管しているんだ？」

「言ったでしょ。オーバーウォッチの本部の残骸だって」ソンブラはじれったそうに言いいつつ、指を素早く動かした。

「ああ、だが――」

「あのね、ありとあらゆる警告記号を付けるってことは……」ソンブラはウィンドウに向かって一度眉をひそめると、扉の操作盤を見て再び眉をひそめた。「国連は誰にもこの中を覗いてほしくないってこと。そういうことでしょ？」

ジャックは眉をひそめた。だがソンブラの言っていることは正しい。

「これでよし！」扉の操作盤のライトが緑色に光ると、ソンブラがジャックに顔を向けた。「出番よ、ジャック。今度はあなたの番」

「ここにお前を連れてくるのが俺の仕事だ。他にいったい何を――」

ジャックは言いよどんだ。ソンブラがこんなにも真剣な顔をしているのは初めてだ。「このために“あなた”が必要だった。そこに私が必要としている何かがある。だけど……それが何なのか私にはわからない」

「じゃあ俺にどうやって見つけろと言うんだ？」ジャックは問い詰めた。

「“あなただけ”が知ってるの」ソンブラは優美な所作で指をジャックに突きつけた。「あなたはオーバーウォッチのストライク・コマンダーだった。本部はあなたの生活の場だったでしょ。あなたはみんなのことを知っていて、世話をしてた。本部がどういう場所だったか、どういう場所で“あるべき”だったかを知ってるはずよ。あのとき、あなたはそこにいた。オーバーウォッチの本部にあるはずのないものを見分けることができるのは、あなただけなの」

ジャックはしばらくのあいだソンブラを見つめていた。「ふざけた話だ」

「よく聞いて。私の情報によると、ここにはその“あるはずのないもの”がある。あの爆発の調査を進めるために国連は証拠を保管しているはずなのに、誰も証拠を調べることすらできないほど厳重に保管してる。だけど、あなたは正にワイルドカード……存在しない存在。ほかの誰にも見ることのできないものが見える。あなたにならわかるはずよ」

推論に推論を重ねた話だ。それでも試すだけの価値はある。瓦礫の中から正義を見つけだせるなら、何だってやる価値がある……。ジャックは扉を力いっぱい引くと、歩き出した。

焼けたコンクリートと金属のにおいが肺を満たし、息を詰まらせると同時に、背後で扉が閉まった。爆発のようにまばゆい照明が点灯している。ジャックは首を振った。ソンブラが通信機越しに何

ノートンの運もついに尽きた。自業自得というべきだろう。

か言っているかもしれないが、轟くような耳鳴りのせいで何も聞こえなかった。あのときジャックは同じ状況にいた。そして死にかけた。コンクリート片に押しつぶされ、親指よりも太い鉄筋によって太ももを貫かれ釘づけにされた。傷はとうに癒えていたが、全身を覆う軽度の打撲や切り傷とは違い、あの痛みは未だに忘れられなかった。ジャックは自分を押しつぶすコンクリートを持ち上げようとしたときのことを思い出した。あのとき、ジャックには死が迫っていた。それまで犯してきたあらゆる愚行を思えば、死んで当然だと思った。自らの愚行を正すことなどできない。正せたとしても仲間を救うことはできない、そう思っていた。そして、力を合わせなければならなかったときに、レイエスと戦うことから逃げた自分――。

レイエスの拳を今でも感じる。続く一撃を受け止めて反撃の拳を振ったとき、その拳が届く前に世界が煙と炎に包まれた。最後にレイエスを一目見た直後、ジャックはうしろに吹き飛ばされた。瓦礫と一緒になって転がり、意識を失うジャック。目覚めたときには瓦礫の下で血を流し、打ちのめされていた。そのとき、ジャックは死を覚悟した。

ノートンの運もついに尽きた。自業自得というべきだろう。

だが、運は尽きていなかった。ジャックは生きていた。それなら、レイエスも生き埋めになっているかもしれない。爆発から離れた場所にいた者たちも同じ目に遭っているかもしれない。ジャックは試しに両腕を動かしてみた。腕の動きを徐々に大きくしていき、無事だった片方の脚を自由にした。身体を動かせる場所が増えたところでコンクリート片を持ち上げ、粉塵が舞い散ると分厚い煙と混ざった。鼓膜がやられたせいで炎の音も叫び声も聞こえなかったが、熱は感じられた。そして脚から鉄筋を引っこ抜いた。目をかばいながらヨロヨロと歩き、かつては壁があった場所に地獄を見た――。

そこは倉庫区画だった。金属の床に積もっていた埃が、ジャックの足にかき乱された空気中を漂っていた。大小さまざまな箱がそこら中に積まれている。どういう順序で積まれているのかは見当もつかない。いちばん近くにある箱の山の上にはいくつかのゴミ箱が重ねられており、コンクリートの塊とねじれた鉄筋が突きだしていた。倉庫区画は爆発に見舞われたかのように混沌としていた。だが、爆発は何年も前のこと。ジャックにはやらねばならないことがあった。

ソンブラの声が聞こえた。「ねえ、ジャック、ねえって……大丈夫?」

「大丈夫だ」咳払いをすると苦い埃の味がした。これは現実だ。記憶ではない。「お前はその証拠が何かを本当に知らないのか?」

「もし知ってたら、あなたは必要なかったわ」ソンブラはそう言ったあとしばらく黙ってから付け足した。「急かすつもりはないんだけど、おしゃべりしてる時間はないわ」

「わかってる」ジャックは部屋を調べた。あまりにも多くの物が乱雑に散らばっている。あの事件の現場を片づけたのが誰だか知らないが、まるですべてを積み上げて扉を閉めただけのようだ。だがそれは悪いことではない。すくなくともソンブラの推論が当たっていたことを示す兆しではある。ここには何かがある。厳重に保管しなければならないほど重要な何かが。肩を動かすと筋肉がきしんだ。ジャックはいちばん近くの箱に向き直った。「取り掛かるぞ」

蓋を開けると埃と灰が舞い、顔にかかった。ジャックは中身を調べはじめた。誰かのデスクにあったと思われるパーティクルボード、半ば焼け焦げた紙の束、未だに際立って見えるオーバーウォッチのロゴ……。ベイレスのマグカップには“世界一のパパ”と記されている。子どもたちが父の日にベイレスに贈ったものが奇跡的に壊れず残っていたのだ。何もかも平凡な品ばかりで、痛ましいほどに懐かしく、“ここにあるべきはずのないもの”など見当たらなかった。次の箱も同じだった。その次の箱も。ある箱には溶けたホッチキスが入っており、焼けた紙片が溶けたプラスチックに貼りついたままになっていた。その紙には見覚えがあった。“四階からの持ち出し禁止！！！！”――かつてキャスディがホッチキスをサイパンまで持っていって、浜辺で写真を撮ったことがある。

「警備がヌルセクターの襲撃の対応から戻って来る」ソンブラの声が聞こえた。

「ここに戻ってくるには時間がかかるはずだ」ジャックは別の箱を開けながら言った。

「でも、私たちがここから出るにも時間はかかる」ソンブラは語気を強めて言った。「それもちゃんと計算に入れて」

「了解」ジャックは箱をくまなく物色した。紙の束、壊れたデータ・ドライブ、溶けたプラスチックの塊を見つけては、次の箱を物色していく。ソンブラの言うとおり急がなければならない。だが何としても、ジャックは見つけなければならなかった。

次の箱には紙束と焼けたガラスが積まれていて、底にはケラーの可愛らしいコーヒーマシンの残骸があった。ケラーが一ユーロの使用料でみんなに使わせていたものだ。彼女のスマホの隣にある紙コップにはよく貨幣が積み上げられていた。次の箱の中身は誰かがデスクに置いていたもののようだ。溶けたキーボードや砕けたスマホ。オーバーウォッチ支給の飾り紐にはタグが付いたままになっていた。IDの写真は汚れて黒ずんでおり誰かはわからなかった。ジャックは物品をそのままにして次の箱に移った。

「あと十分」ソンブラが言った。「それでもぎりぎりよ」

ジャックは姿勢を正した。爆発の記憶のように埃が胸につき、あのとき鉄筋に貫かれた太ももが焼けるように感じられた。ここにあるはずのないものがある。しかし、懐かしい品々が現れるだけで、そこにあるのはオーバーウォッチの残骸だけだった。さらにいくつかの箱を調べたが、溶けたデータ・ドライブ、焦げたキーボード、潰れて引き伸ばされ、焼け跡が付いた真鍮製のカートリッジ・ケースがいくつか見つかっただけだった。

「五分」ソンブラが言った。

「わかった」

「思ったより警備の動きが早いわ」

「聞こえている」ジャックは言った。言えることはそれだけだった。移動を続け、床面の一部だったと思われるコンクリートの塊に登った。次の箱には、煙で黒ずんだオフィス機器がこれまで以上に散乱していた。その奥の箱には紙束と汚れた金属塊が入っていた。金属塊を引っぱると、もとはてっぺんにヤシの木が付いていたデスク用の置き時計だとわかった。財務部門の責任者がゴルフ大会でもらった二位の景品の置き時計のようだ。その下には紙束と木片の層。さらにその下で、金属質の何かが光を浴びてきらめいた。

ジャックはそれを引きぬくと眉をひそめた。平たい円盤だ。大きさと形は地雷のようだが、どう見ても“地雷ではない”。外面の大部分はマットブラックでゴムのような肌触りで、その大きさの割にずっしりと重い。光をとらえたのは銀色の縁取り部分だ。その正体を示すような記号もなく、見たところ継ぎ目もない。用途を推測する手がかりさえなかった。オーバーウォッチのものでもなければ、国連のものでもない。ジャックはその円盤を見たことがなかった。ソンブラが言っていたものはこれに違いない。

ジャックは振り返ると扉へ向かい、通信機を操作した。「見つけた」

「ギリギリよ」扉が開いた。ソンブラが宙空で編むように両手を動かす。「あと三分」

「なら急いだほうがいいな」

二人は階段を駆け上がり、時間ギリギリのところで脱出に成功した。ソンブラの先導で小道を抜け、いちばん近い建物の屋上に上がる。ソンブラはそこで立ち止まると、再びホロスクリーンを表示させ、眉をひそめながらコマンドを入力した。ジャックが肩越しに覗き込むと、そこには走るジャックをとらえた監視カメラの映像が鮮明に映しだされていた。ジャックは顔をしかめた。しかし、ソンブラがひとたび手を振ると映像は消失し、スクリーンは緑色に点滅した。「消せるのか」

「当たり前でしょ」ソンブラはそう答えると、隣の屋根に飛びうつった。

ジャックには到底“当たり前”には思えなかったが文句は言わなかった。しばらくソンブラにしたがって建物から建物へと飛びうつると、やがてソンブラの足取りがゆるやかになった。空が明るい。燃えているのではない、日の出だ。ジャックは振り返り、ここまでの道に目をやった。保管施設の周囲をドローンが旋回しているが十分な距離がある。こちらには気づかないはずだ。ソンブラはジャックが見ていた方向を見て髪をかき上げた。

「心配ご無用。あいつらのシステムにちょっとしたプレゼントを残しておいたの。私たちのことは無視してくれるようにね」

「そのプレゼントが誰にも見つからないことを祈るしかないな」ジャックは条件反射のようにうなった。夜明けの空気は沸き立つようで、焼けた燃料や壊れたコンクリートとコルダイトの悪臭はもはや消えつつあった。東ではヌルセクターの主戦力が街を襲撃したことを示す煙の塔が細まり、油めいた黒色は灰色に薄らいでいた。消防士たちが鎮火しているのだろう。この街は運がよかった。ヌルセクターはより重要な標的に戦力を再結集している。なんとかチューリッヒは耐えぬいたのだ。すくなくとも今回は。

ソンブラが咳払いをした。「さて、見せてもらいましょうか?」

ジャックは再び考えにふけった。記憶が湧き上がり、血の味が口内に蘇るとレイエスの激しい怒りがまざまざと感じられた。あの爆発の瞬間、すべてが吹き飛ばされる直前、レイエスは目を見開いて驚いていた。

「ああ」ジャックは上着の中に手をやり、銀の縁取りの円盤を掴んだ。黒のコーティングは昇りくる陽光を吸収しているかのようで、発見したときよりも不吉な様相を漂わせていた。

ソンブラは視線を鋭くしたが、円盤に向かって手を伸ばしはしなかった。「確かなの?」

「あるはずのないものを探せと言ったのはお前だ」ジャックは言った。「これはオーバーウォッチが作ったものじゃない。国連が運用している兵器の中にもこんなものはない。この円盤の正体は“お前が”知っているはずだ。これが探していたブツだ。さあ、報酬を払ってもらおう」

「そんなの見たことないわ」ソンブラは言った。「スキャンしてみていいかしら?」

ジャックは首を振った。「報酬が先だ」

「わかったわよ」ソンブラは少し考えてから言った。「オーバーウォッチを壊滅させたのは誰だと思う?」

ジャックはためらった。「以前なら、誰もがタロンの仕業だと言っただろう。レイエスやオデオレインも手を貸したかもしれない、とな。今でもそれがもっともらしい答えに聞こえるが、ずっと違和感を覚えてきた。お前から得た情報を踏まえても、その答えは間違っていると思える。だから、タロンではない。ほかの誰かだ」

「あなたは最初からそう思ってたでしょ」ソンブラは言った。「私から情報を得る前から」

ジャックは再び考えにふけった。記憶が湧き上がり、血の味が口内に蘇るとレイエスの激しい怒りがまざまざと感じられた。あの爆発の瞬間、すべてが吹き飛ばされる直前、レイエスは目を見開いて驚いていた。「何もかもが吹っ飛んだとき、俺はレイエスと一緒にいて、あいつを見ていた。あいつは俺と同じように驚いていた」ジャックは頭を振った。「タロンの仕業であれば、レイエスも事前に知っていたはずだ」

ソンブラはうなずいた。「その円盤をスキャンさせて」

ジャックは円盤を差しだした。ソンブラが一歩前に出ると、その手から光が伸びて円盤の表面に溶けこむように消えていった。ソンブラが表示させたホロスクリーン上で一瞬だけデータが飛び交い

消えていく……そして、奇妙な印がゆっくりと現われた。瞳孔の上と下にそれぞれ三つの点が描かれた目のシンボル。

「見たことある」ソンブラが言った。「この糸をたどればタロンにつながるはずだけど、さらにその先にタロンよりも強大な何かが……あるいは誰かが潜んでる。だから私はあなたにも情報を送ることにしたの。私が持っていないパズルのピースをあなたが持ってることを知っていたから。見返りがないかぎり、あなたが協力してくれないということもわかってた。それに、これ――」ソンブラは円盤を顎で示した。「そのマークが証拠よ。それが奴らのシンボル。それを目印にすれば、奴らを見つけられる。私は手始めにオアシスから調べるわ。もし何かわかったら、あなたにも知らせてあげる」ソンブラはスクリーンを閉じ、片手を差しだした。「公正な報酬を払ってくれるならね?」

ジャックは円盤を見た後、ソンブラの手に視線を移した。この円盤はジャックが探し求めてきたチャンスだった。単なる手がかりでもなければ、噂でも説でもない。確固として現実に存在し、追いかけることのできるチャンスだ。すべての答えではない。しかし、このチャンスを活かせば、一つのシンボルからより多くの情報を得ることができる。それができるのはジャックしかいない。生きのびられなかった者たちのためにそれを成し遂げなければならない。すべての死が重くのしかかる中、ジャックはうなずくと円盤をソンブラに渡した。「いいだろう」

「ありがと」ソンブラは驚いたように言った。ジャックが拒否すると思っていたのだろう。ソンブラがもう片方の手を使って屋根の端から何かを投げると、その姿はあっという間に消えていた。

ジャックは首を振った。あの円盤はジャックには必要ない。ソンブラはジャックが必要としていたものをすでに与えてくれた。追いかけることのできる現実の手がかりを。老いぼれの老体かもしれないが、往くべき道は必ず見つかる。ジャックはとにかく運のいい男なのだから。